

My favorite things : Research and Music

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/19728

魅せられるもの～研究と音楽～

My favorite things: Research and Music

金沢大学医薬保健研究域医学系細菌感染症制御学
(微生物学)

清 水 徹

「研究」と「音楽」、この一見何も関連のなさそうな二つであるが、自分にとってはこれまで深くかかわってきた大切なものである。「研究」に関しては、私大の文系学部から医師になろうと思い医学部を再受験したが、学部生時代に病原細菌学に興味をもち、卒後そのまま大学院へ入学して以来、医学細菌学における研究生活を続けてきた。一方「音楽」に関しては、小学校6年生の時に親に買ってもらったギターを弾き始めて以来、中学でフォークソング(古い!)、高校ではロックバンドを組むかたわら、部活のプラスバンドでトロンボーンを吹きつづいろいろな曲を編曲したり指揮したり、最初の大学ではプロのギタリストになりたくて様々なオーディションを受け、医学部では軽音楽部でフェージョン系のバンドを作り、ピアノやシンセサイザーナなどのキーボードを自己流で弾いていた。医学部卒業後は、大学院生や大学教員としての研究に専念し、バンドを組む仲間もおらず、時間を見つけてはコンピュータを使って作曲・録音したりして、自己満足ではあるが細々と音楽を続けてきた。

思えばこれまで、「研究」も「音楽」もどちらも止められないものであった。研究においては、いろいろ苦労してたくさん実験をしても、結果として思い通りのデータを得られないことが圧倒的に多かった。しかし、たまにだが「とうとうやった!」と喜べるいいデータが出る。その時の喜びは何ものにも代えがたく、とにかく嬉しくてしようがない。この出来事が一種の快感になり、さらに良いデータを出そうという励みになり、いつの間にか研究が止められなくなる。自分で実験しなくとも、教室の誰かが良いデータを出すと、みんなで「やった!」と喜び合える。ますます止められなくなる。音楽をやっていても、やはり感動する瞬間がある。バンドで演奏している時に「何だ、この感じは?」と思える時があり、いろいろな楽器音の混じり方、強弱の程度、みんなの演奏中の目つきや笑顔、その他様々なものが作り上げる最高の「音楽」が存在する瞬間がある(なかなか言葉では表せないが)。この感覚が忘れられず、音楽を止められなくなる。演奏している側も聴いている側も同じ思いを共有できれば、ますます止められなくなる。

「研究」と「音楽」に共通と思えるものが他もある。どんなジャンルの曲でも、あらゆる音楽の進行には基本的な決まりがあり、それが音楽の連続性と終わり方を決めている。音楽で使われる和音(コード)の一つにドミナントコード(ハ長調で言えばソシレファ、これはG7と表記され7thコードとも呼ばれる)があり、このコードの響きは非常に不安定で、次に主和音(ドミソ)に動いて解決されるのが基本である。この動きで最も有名なのは、学校の朝礼時のピアノ、「起立(主和音)ー礼(ドミナント)ー着席(主和音)」である。ドミナント(礼)のあと主和音(着席)に解決することで終止感(安心感)が得られている。こういうドミナントにより演出される音の動きが美しい音楽の流れを作り、常に変化をともなうダイナミックな動きを作り出すとともに、聴く側にも不安定感や安定感を与えることにより感情の流れを演出する。この動きの極端な例が、5度進行(cycle of fifth)と呼ばれるもので、

「C7-F7-B♭7-E♭7-Ab7-D♭7-G♭7-B7-E7-A7-D7-G7-C7…」

という風にすべてのコードをドミナント(7thコード)にすると、不安定さを保つつすべての調のコードに動いていき、一周して始めのコード(C7)に戻る。この進行の中では解決したと

見えても、次のコードがまたドミナントなので、すぐ次に動くが、またドミナントで…というように本来の解決が見られず、永遠に動き続ける流れを持っている。実際、研究においてもほとんどの同様のことが起きる。あるメカニズムを解明しても、いつも次の課題が見えてきて、またそれに向けて実験をして解決しても、さらにまた別の問題が出てきて…というように連続的に解決すべきいろいろな研究課題が出てくる。おそらく音楽で言う主和音には永遠に解決しそうにない、いわば「キリがない」状態である。音楽の動きに「キリがない」のは、この芸術に深遠さや多様性を与えるものであり、研究に「キリがない」のは、生命の深遠さや多様性のためであると考えてもいいかも知れない。

大学を卒業してからは、音楽を演奏する時間や機会がほとんどなく、研究や教育など大学の仕事だけの生活が続いていた。帰宅しても、ギターなどの楽器はあるが、何年も弾いてない状態のままであった。そんな中で、ふとしたきっかけからピアノの先生に出会うことができ、クラシックピアノを習う機会を得た。すでに3年半、ほぼ毎週ピアノのレッスンに通い、クラシックピアノを教えてもらっている。何しろ50代の手習いであり、小さい頃にもまったく習ったことがなく、指使いや手首の使い方、音の出し方など基本的なことが欠け、おまけに練習時間があまりとれないなど、弱点ばかりで苦労はするが(先生も辛抱強く教えてくれるので、感謝!), とにかく「楽しい」の一言である。若い頃は「クラシックなんて!」とまるで馬鹿にしていたが、いざやってみると、その芸術性の深さや歴代の作曲家による曲の素晴らしさなどに感動しきりである。これまでに、ショパン、リスト、ベートーベンなどの曲を練習し、通っているピアノ教室の発表会に小さな子供たちに混じって出したり(かなり違和感を与えているが…), ピアノの連盟などが主催する演奏会に出たりして、自分なりに精進しているつもりである。まだ人前で弾くと手が震えたりして緊張感いっぱい(?)の演奏ではあるが、少しでも自分らしいピアノ演奏や表現ができるように、と思っている。ピアノの良い所は、一人でも曲を弾けるということであり、自分で音楽を演奏できることが一番の楽しみで、今までにない音楽生活を送っている。

「研究」の楽しみは研究対象(私の場合は病原菌であるが)に関して今まで誰も知らなかったことを発見し、その意義を考えることにあると思う。どんなに些細なことでも実験を重ねて事実を明らかにすることは、我々の「知的好奇心」を満たし、アカデミックな喜びを与えてくれる。この純粋な楽しさがあるから研究は止められない。しかしこの楽しみはあくまでも、すでに自然界に存在している研究対象に対する冷静な「分析」によって得られるものであり、音楽によって得られる楽しみとはまったく性質を異にしている。逆に「音楽」の楽しみとは、曲を自分で作りメッセージを伝えたり、既存の曲でも自分なりの表現で演奏して自分の思いを伝えるなど、本来感情的で「クリエイティブ」(創造的)なものである。研究における分析に感情や創造が入り込む余地はないよう、音楽も冷静な分析だけでは成り立たず、生身の人間のエモーショナルな面が主役となる。

こういった「研究」と「音楽」、これら何となく相反しそうなものに魅せられながら、今後も自分の中で分析的マインドと創造的マインドを育てていくために、より一層精進していくと思う。